

本論文集の構成——あとがきに代えて

本論文集の主旨については、本書冒頭の「本書の主旨と目標——まえがきに代えて」および「共同研究の構想と概要——導入のために」に記したとおりである。冒頭では、かなり大規模な研究計画を含む見取り図を示したが、いうまでもなく、そのすべてを本書一冊で論じ尽くすことは、問題のひろがり、一冊の研究論文集の紙幅との関係からして、もとより不可能であった。以下、本書に収録できたおのおの論文の骨格と、論文相互のつながりを最小限確かめつつ、編者としての所見をも若干述べることによって、本書のあとがきに代えたい。

第I部「東洋」イメージの変遷と葛藤

第I部では、「東洋」という枠組みが、自然的な所与ではなく、聞きあう利害という力の場に形成された構築物だったことを、幾つかの個別例を通して、時間と空間の重なりにおいて具体的に跡付けた。「東洋」といえば、すぐにも『東洋の理想』『東洋の覚醒』などの書名が思い出される。だが、その実態を我々はきちんと把握しているのだろうか。そしてそこに育まれた「東洋意識」とは、いかなるものだったのか。

木下長宏は、「岡倉天心」という尊称が「アジアはひとつ」という標語に結びついて人口に膾炙したのは、その人物の没後、とりわけ超国家主義高揚期の出来事であり、それは歴史的な岡倉覚三とはかけ離れた幻影だったことを立証する。「天心」像の呪縛は、敗戦後の思想界における左右対立のなかでも温存され、現在に到るまで

再生産されている。とりわけ『東洋の覚醒』とは、浅野晃が一九四〇年に「捏造」した題目だったが、この事実ですら無頓着な思想史の教科書が跡を絶たない現状に木下は疑念を呈する。「天心神話」の解体は、本書全体の出発点となる。近代におけるアジア像の変貌が何を意味するか、問わねばならない。

豊田市立美術館で開催された『近代の東アジアイメージ』展（二〇〇九）は、日本が東洋と呼ばれた地域に投げかけた視線と表象とを検討する機会を提供した。これを題材とした千葉慶は、とりわけ台湾における官立の美術展に焦点を絞る。「地方色」の演出に腐心した関与者の背後に見え隠れする利害関係の多声性を腑分けする千葉は、そうした方法論を拒絶する研究者への苛立ちを隠さない。確かに表象像が広義の政治―生産・消費・流通の力関係―に掉さすことは、その作家の狭義の政治的立場や良心とは別次元の問題である。だが両者を意図的に短絡させ、逆に恣意的に分離することで、現実社会は構成され、操作される。

とすれば、千葉がその分析枠を検討する「植民地主体」の問題は、いやおうなく論者自身の立場を炙り出し、研究主体の関与を要請する。学術的議論は、公平中立な装いゆえに、特定の利害に加担する。小田部胤久はカー・ル・レーヴィットの日本に関する議論を細密に分析し、その利害の実相に迫る。西欧近代化の渦中における東洋像は、ユダヤ系ドイツ哲学者の日本さらには北米への亡命、そして戦後の帰国の過程で変貌を遂げる。当初彼が他者なる日本に認めた伝統と近代の二階建ての遊離は、北米体験を経て、他ならぬ欧州に逆投影され、空中楼阁と映ずる「アメリカ化」の世界制覇が、思想的課題を突きつける。

第Ⅱ部 東洋人の自意識

ここで改めて、そうした変動を経験した世界に翻弄された「東洋人」の自意識を問うことが必要となる。従来とすれば日本人の西欧体験といった図式でばかり論じられた問題だが、第Ⅰ部を踏まえるならば、そこからは、

東洋の覇者を演じた日本に接した他の「東洋人」たちが欠落していたことにも気づかされる。

まず古田島洋介は、井上哲次郎や森鷗外と同時期にベルリンに滞在した潘飛声を取り上げ、かれらの交友を手がかりに、日中の関心の交錯のなかで、かれらの滞欧体験を照射する。漢詩という枠組みは、当時の東洋の知識人にとって、みずからの感興を託す唯一の表現手段であり、漢文による筆談がかれらの意思疎通手段の一斑をなしていた。そこでいかなる話題が取られ、反対にいかなる主題が脱落するのか。この観察からは、かれらの言動のみならず、それを左右する知覚装置の特性が見えてくる。中日のみならずインドやタイの留学生を含む「興亜」意識が、ベルリン会議直後のプロイセンの首都で醸成されていた。

つづく李建志は、朝鮮王朝最後の皇太子、李垠の事績に注目する。日本の「日韓併合」に先立つ一九〇七年に伊藤博文の配慮で日本に留学し、地方巡遊なども体験した李垠は、一九二七年五月に横浜を出港し、妻の方子とともに、李王職次官、篠田治策ほか七名の付き添いを得て、ほぼ一年にわたり欧州航路で外遊した。篠田により公刊された『欧州巡航外遊日記』と李王職執筆と推定される「渡欧日記」の記述には細部に出入りがあり、著者はそこから垠の置かれた微妙な立場を読み取ろうとする。さらに日本陸軍中將として遇された李垠と瀬島龍三らの関係が、光復後の李承晩による韓国国軍創設に影を投げたと著者は言う。

劉岸偉は一九五〇年早春に周作人が北京で執筆した小品「東坡の正直」を取り上げる。小文ながらこれは、旧友である林語堂がニューヨークで一九四七年に出版した『蘇東坡』への周の反応だった。共産主義に敵対する態度を鮮明にしていた林は、王安石による新政が実際には民衆に苦難を強いるものであったことを直視する。だが王安石の新政に反対したからという理由で、林が蘇東坡を評価するのは、いささか「反動的」だ、と周は観察する。大陸に残った周自身は、蘇東坡の知識人批判に賛同を寄せるが、そこには折から人民共和国建国直後、「大躍進」前夜の北京で始まった、知識人たちの自己批判に対する周の屈曲した省察が込められていた。政治に翻弄

された文人たちは、自分たちの姿を古人に投影し、運命を慮っていた。

第三部 東西融合の夢と現実

このように東アジアの近代にあっては、西欧の衝撃のもと、国民国家から社会主義までの振幅をもつ急速な変革が発生し、新たな価値観が模索された。その多くは、なんらかの形で東西の差異に折り合いをつけ、東洋の伝統を西洋の枠組みに包摂しようとする試みの形を取る。第三部ではその三例を検証する。

まず鵜飼敦子は、フランスのナンシーに最初期に留学した高島北海を検討する。アール・ヌヴォーのガラスや家具装飾で著名となるエミール・ガレ他の藝術家たちと親交を得た北海は、伊藤博文とも同郷であり、東西の絵画観の相違を実作者として肌で体験した画家でもあった。農林技師、地質学者として西洋の学術に接した北海は、実測や植物写生にも秀でた業績を残す。と同時に彼は東洋山水画の精髓は「写真」でなく「写意」すなわち実景を理想化するところにある、との持論を『写山要訣』に展開する。東洋人には東洋の伝統が相応しいとする説には、あるいは当時流行の遺伝学などの影響もみるべきであろうか。

一九三二年に八二歳で没した北海は、一九二〇年代の南画流行の時代にも活躍していたが、画業からは時代の新風に乗った痕跡は認め難い。それは、北海よりちょうど十歳年長の富岡鉄斎が八十代の晩年に高く評価されたのと対照をなす。編者・稲賀は『白樺』以来の日本におけるポール・セザンヌ受容に焦点を絞り、いかにして第一次世界大戦後の極東で、後期印象派からドイツ語圏表現主義への潮流が、東洋の南画と、理論および実践の両面で競合したかを追跡した。一九一〇年代の西洋最新流行への陶醉は、二〇年代になると東洋的美意識の再評価へと反転し、その延長上に上海を中心とする三〇年代モダニズムが開花する。

これに輻輳する時期の欧州における東洋美術研究組織の動向に注目するのが、つづく安松みゆきの論考である。

一九二六年にベルリンに創設された東亜美術協会は二九年の最盛期には千名を越す会員数を誇った。会長にはとも日本大使を歴任するゾルフとデイルクセンの名が見え、中枢を担ったキュンメルとライデマイスターも日本美術専門家として知られる。一九三九年の伯林日本古美術展の舞台裏については矢代幸雄の回想もあり、本章はその背景となる前史を発掘する。東洋学と文化政策とは両大戦間の政治情勢の進展といかに結託し、推移していったのか。その解析に、ベルリンの学術的地政学は看過できない。

第Ⅳ部 演出される「東洋」

とはいえ「東洋」は西洋の東洋学に対して、けっして無口で受身な素材を提供しただけではない。とりわけ一九三〇年代に入ると、日本のみならず中国からも、欧米に積極的に働きかけ、自ら「東洋」を演出しようとする傾向が顕著となる。いわば東洋の自意識が文化制度のうちに顕現し始めるといつてもよい。

先述のベルリンにおける日本古美術展には、一九三五—六年にロンドンで開催された中国藝術国際展覧会への対抗という面も否定できない。範麗雅はこの倫敦大展覧会について、主に英国の新聞雑誌記事を中心に分析を進める。開催の裏には日本の大陸侵攻下で英国輿論の支援を期待する民国政府の思惑があり、欧州側から見ればこれは故宮博物院の秘宝を観覧する空前の機会となった。範論文はこの展覧会を中英の価値観が衝突した文化摩擦の現場として解析する。陶磁器専門の考古学や西洋美術の絵画範疇は書画一如の境地には適合せず、公共空間における美術品展示は、中国文人の書画骨董の愛好とは、見事に背馳した。

ここで露呈した東西の審美的価値観の相克は、極東における学術のありかたにも影を落とす。藤原貞朗は東京帝国大学初代の美術史教授、瀧精一の業績に肉薄し、戦前期日本の学術が抱え込んだ心理的複合を抉り出す。考古学的現地調査において遅れをとった日本の官学は、中国正統の文化理解において日本が西洋より優位にあるこ

とを誇示する一方、中日の書画を中心とする「東洋美術史」という枠組みに固執する。十九世紀後半の日本趣味に続き、中国にこそ東亜美術の精髓を見ようとする西欧東洋学の動向に対して、日本の学者たちが吐露した敵愾心が、二〇年代の南画復興への一布石となったとの仮説を藤原は展開する。

西側列強に対抗しようとする民族意識は、年号が昭和に改まった一九二〇年代後半から、強烈な国家主義的色彩をも帯びてゆく。その典型が、蓑田胸喜主催の『原理日本』に見られる。足立元はこの右翼雑誌の同人として皇国主義的美術論を展開した田代二見に焦点を絞り、一九四一年の通称「シュルレアリズム」事件——瀧口修造と福沢一郎の検挙——の背景に、前衛藝術弾圧の思想的根柢が胚胎されていた様を解明する。御製の和歌の言霊を寿ぐ皇国の集合的生命を個の自由に優先する価値観は、集合的無意識に訴える限りで、超現実主義と隠微な共犯関係すら孕んでいた。であればこそ田代の側には、超現実主義を左翼思想一般と無理やり同一視してでも葬り去る短絡的決め付けが、思想扇動上、要請されていたことにもなる。

第V部 美的東洋の探究と桎梏

『原理日本』は、民族的共感世界を土台とした皇国意識が、學術の装いのもとに「紙製凶器」として働きえた時代相を、まざまざと映し出す。このように戦前期から戦中期にかけて、東洋意識は尋常ならざる高揚を見せるが、日欧対比を東西対比にまで異常肥大させて拡張した審美的伝統の差異化は、美を思索する學術において、どのような探究を動機付け、いかなる桎梏を顕在化させたのだろうか。これをめぐっては、相互に深い関連をもつ三篇の論文を得た。そこから導かれる課題を、この場で手短かに検討したい。

濱下昌宏は西欧の學術による制覇が進行する文化環境で発生した葛藤と反作用とを思想的に類型化する。これは本書全体の志向を要約する中締め役を果すが、それを起点に濱下論文は「崇高」を例に、西欧美学の

概念志向と、日本の事例との相性を診断する。ハイデッガーは手塚富雄との対話で、九鬼周造の「いきの構造」を話題に、日本美学を西洋語に依り西洋学術の範疇に沿って分析することは、日本語の言語特性を犠牲にし、日本美学の本質を却って隠蔽する、との危惧を表明していた。同時代の大西克禮も、あはれ・幽玄・侘び、を西洋的美的範疇の派生現象と捉えたが、この方法的服従は何を意味するのか。

ここには欧米の学術範疇を普遍的なものと同じ視し、そこへの帰属によって東洋美学に市民権を付与しようとする傾向が顕著にみられる。だが金田晋によれば、大西に先駆けてドイツに留学した鼓常良は、ジンメル額の縁論ほかを参照しつつ、その反措定として *Rahmenlosigkeit* (鼓自身の訳では「無框性」) なる用語を案出し、「枠なし構造」を鍵に日本美を解析する。鼓の議論がドイツで好評を得た背景には、世紀末の日本趣味以降、西欧の美的規範が造形美術の分野で危機に瀕し、全体性を凌駕する断片性への注目が嵩じていた状況がある。絵画では透視図法の崩壊、文学では韻文の散文への解体が、時代の危機を代弁した。

永遠ではなく瞬時へ、絶対に対する偶然へ、不易から移ろいへ、とは詩人ボードレーが一八六三年に下した現代性 *modernité* の定義だったが、日本美学さらには「東洋美学」が、地球表面を覆う現代性の潮流のなかで「西洋美学」に対する代替案を突きつけたことは否定できまい。それを踏まえた大橋良介は、あくまで西側の学術伝統に目配せしながら、そこで軽視されてきた「半」に注目し、西欧伝統の美的体系に揺さぶりをかける。「半」の横溢性をめぐる大橋の省察は、鼓の「杵欠如」に具体的な「場」を与える一方、偶然性を取り込む仕掛けとして、九鬼周造の「偶然性の問題」の延長にも位置づけうる射程を秘める。

ここから大橋は「道」を再定義し、全体を志向する「体系」性から逸脱し、範疇に収まることを拒絶する時間軸の運動、と規定する。それが空間に分節すれば、西側の認識枠からは「無・框性」と形容する他ない現象が観察されようが、大橋はこの「無」に積極的な意義を与える。「東洋的無」は異国情緒としての東洋趣味と親

近性を帯びる危険とも裏表だが、思えば晩年の魯迅が西欧との対抗のなかで唱えた「風狂」の開き直り（浜下昌宏）も、安易に「全体」志向へと包摂されることの危険を直観した覚悟だったはずだ。

九鬼や大西は、あくまで西欧の学術体系に忠実に振舞い、西欧学術言語の運用能力をもちながら、帰国後はもっぱら日本語で執筆するという自閉的退却に自足した。鼓はこれとは対照的に、ドイツ語をも武器として日本美学の特性を西欧学術世界に向けて訴え、東洋の「粹欠如」により西側の学術的枠組みに挑戦した。その鼓がほどこなくドイツ国家社会主義と接近して時流に乗り、敗戦後に疎外されたのは、単なる偶然に過ぎなかったのだろうか。国際的に通用する思索は政治的覇権主義と同調しやすく、反対に国際的通用性に欠けた思想は、唯我独尊、偏狭な自己中心も露わな国粹主義へと内没する傾向を呈するのだろうか。

第Ⅵ部 経営事業としての「東洋」

だが、事はさほど単純ではあるまい。超国家思想に基づく東洋主義も、西側の政治思想を咀嚼した結果として出現した怪物であり、大東亜共栄圏の構想も、大英帝国の Commonwealth を意識した、思想的租借地に他ならなかったからである。かくして経営事業の対象としての植民地「東洋」が視野に入ってくる。

佐野真由子は一九三四年に創設された British Council が独立途上の植民地インドで模索した、文化事業のための理念確立への航路を、一九四五から四七年にかけての現地調査報告に関する原史料を基に復元する。宣伝工作との嫌疑を避けつつ、植民地経営からは距離を取った「相互的文化事業」の装いを凝らしながら、しかも国益に配慮する「非政治的」機関が孕む「政治性」が浮き彫りにされる。ドイツの Goethe Institut 設立が一九三二年、日本の国際文化振興会 (KBS) 発足が一九三六年。これらの公的な対外文化機関設立の時局性は顕著であり、北米新興国からの影響力増大への懸念がそこに大きな影を落とした事実も、看過できまい。

このように英米が主導権を競う国際情勢のなかで、フランス領の「極東」を構成した「インドシナ」は特異な事例を提供する。林洋子は、画家という以上に、日仏外交に関与し、安南王室との交渉に先鞭をつけた政治家・黒田清輝と、その学生であり、日米戦争開戦直前に「仏印巡回日本画展」随員として仏領印度支那を歴訪した藤田嗣治とに的を絞り、日本の「仏印文化工作」の実態の一角を観察する。ヴェトナム（越南）は、英国支配のインド洋経由の欧州航路寄港地からは抜け落ちており、日本軍の南進以前には、日本ではおおよそ影が薄かった。欧州の戦禍を代償に、植民地都市・ハノイはパリの場末の代替地となった。後述のとおり、その「仏印」が戦時下日本で注目された裏には、アンコール・ワット遺蹟の存在も看過できない。

植民地都市―それは仏領インドシナのみならず、日本統治下の台湾や、強制的に併合した韓国、さらには大連や旅順を含む関東洲から南満洲鉄道沿線の付属地、そして日本が軍事的に傀儡政権を樹立した満洲に至るまで、広く見られた現象と解釈できる。朴美貞は京城（現・ソウル）に関して、その近代都市としての発展が、日本統治の縮図だった事実を、当時の資料を駆使して解き明かす。とりわけ朝鮮博覧会や各地で開催された物産展が、商品経済の発達と物流の促進に貢献して、「日帝支配」の基盤を成したことは否定しがたい。従来議論では、日本統治時代は「植民地収奪」の負の遺産として一括して否定されてきた。そのため却って隠蔽されてきた社会史の実態と、朝鮮側の主体的関与の現実とを解明することが、急務となる。

*

朝鮮の作家、金南天（一九一―？）の短編「麦」（一九四一）には、二階で洋食を食べ、一階では大根キムチを齧る自分たちの二重人格性を揶揄する科白が見られる。これは小田部が引用するレーヴィットの近代日本の二階立て構造そのままの比喩としても興味深い。例えば伝統的な両班の邸宅は平屋である。二階立ての建物が京城を占領し始めた状況そのものが、支配者・日本の持ち込んだ擬似西洋風の植民地風景であり、転向マルクス

主義作家は、なかば無意識のまま、そこに自らの植民地一市民の自己疎外を投影していた。

本書で取り上げた「東洋意識」とは、右のような一見なげない小説の細部にも宿れば、反対に大規模な国家事業に挺身した文化人や行政官の精神にも棲まっていた。こうした問題意識に先鞭をつけた研究者として、平川祐弘による講演を巻末に収録した。『源氏物語』に対照的な評価を下したふたりの日本学者、チェンバレンとウエイリーとの対比を軸とするその絶妙の話術は、読者各位に堪能して頂くこととして、ここでそれを要約する無粋は犯さぬこととする。その代わり、蛇足そのものの逸話をひとつ付け加えたい。

たしかに『源氏物語』はウエイリーの英訳によって二十世紀英語文学の古典となり、英語圏における日本ひいては東洋意識を刷新した。だが、ウエイリー訳には自在な取捨選択がなされており、例えば源氏が柏木の遺児、薫をわが子として慈しむ場面は、抹消されている（この事実は、平川の名著『アーサー・ウエイリー『源氏物語』の翻訳者』（二〇〇八年）では省略されている）。実はこの場面で紫式部は『白氏文集』から白居易の漢詩の一節を引きながら、その肝心な一行「一珠甚小還慙蚌」をわざと脱落させていた。奇しくも白楽天の翻訳に意図的な脱落を仕組むこの「隠し刃」（中西進）によって『源氏物語』は古典としての価値を高め、またその英訳は、原作の中心をなす姦通事件のこの核心の心理描写を脱落させることで、名声を獲得した。ここには「古代東亜圏」の「東洋意識」と、その近代西欧における受容の逆説とが集約されている。¹⁾

編者は本件を国際比較文学会で報告し、「東洋」理解における英訳万能という「原典から距離をとった読解」*distant reading* の危険性を指摘するとともに、それを補完する方法として「原典からの隔たりを読む読解」*distance reading* の必要性を提案した。英語という媒体で発信できなければ「東洋」の真実は世界に知られない、という焦燥感の裏には、英語に翻訳されてしまった「東洋」がいかに歪曲されているかを見落とす陥穽がひかえてもいる。さらに、こうした異文化翻訳の過程で、話題の焦点が移動する生態を説いたのは、本学会が「古き辺境とあ

らたな中心」と題し、文学創作の場の移動を扱うものだったからである。

だが副題に「グローバル化する世界における欧州文学の遺産」を掲げたその学会報告書は、『源氏物語』の英訳では欧州文学の遺産とはみなされぬ、という判断からか、受理しておいた編者の論文の収録を、校正終了間際になって拒絶した。文学的遺産が、翻訳過程での抹消操作により、東西往還のなかで新たな生命を得る、という不死鳥さながらの逆説的分析そのものが、欧米における学術的受容において抹消された。取るにも足らぬ私的な事件で恐縮至極だが、えてしてこうした体験から「洋行帰りの保守主義者」、頑なな国粹主義の東洋至上主義者が発生したことも、歴史は我々に教えてくれる。また、こんな矮小なる出来事にも、旧来の「東洋意識」の残滓が覗く。文学のグローバル化と流動性を議論するはずの場にあっても、なお「東洋文学」が排除されたのだから。

*

寄稿者各位の業績については、寄稿者一覧の記載を参照頂きたい。そのうち、ただ一例に触れるにとどめるが、フランスがハノイの設置した極東学院と、アンコールワットに代表されるカンボジアの発掘事業に関しては、すでに藤原貞朗の名著『オリエンタリストの憂鬱』（二〇〇八年）に犀利な分析がある。そこで列伝風に語られる「フランス東洋学者の憂鬱」もまた、首都から遠く離れた亜熱帯の植民地に逼塞する出先研究者の「東洋意識」、その偉大と悲惨とを切実に映し出す。日米開戦とともに危険人物として収監された小松清については林洋子も注記しているが、その小松清は出獄後、ハノイに赴任して日本占領期の仏印工作に従事し、日本敗戦直後にはヴェトナム臨時政府と仏政府側との水面下の接触にも関与した。この折にホー・チミンとの単独会見をも果たした小松はまた、バンティアスレイ遺蹟石像窃盗事件で逮捕された経験を『王道』（一九三〇年）で小説仕立てにしたアンドレ・マルローとも親交を得ていた。その小松が暗に批判する外交官、柳澤健は、国際文化振興会発足の影の立役者といつてよく、佐野論文にも登場するが、彼は外務省辞職後、バンコックの日本文化会館館長に赴任し

ていた。これらは数例に過ぎないが、国家事業と文化外交の現場に参与した人々の行動と意見を徹し、政策の裏面に隠された機微を探るには、さらなる研究が要請されよう。^②

東洋人が東洋としての自覚を得たのは、アヘン戦争期以降のことといつてよい。また西側世界が東洋を認識した契機としても、日露戦争は無視できない。本書で扱う「東洋意識」は、おおよそこの段階から、日本敗戦後の占領政策終了までの時期に、とりあえず限定した。このなかでも、とりわけ戦前期から十五年戦争と呼ばれる大陸侵攻期、さらには南方侵出期の大日本帝国の去就は、文化事業の名目で展開された国際的な文化闘争の局面からも、あらためて抜本的な反省を要する。だが、敗戦後の日本の半世紀余に渡る学術が、いわば臭いものに蓋という姿勢で、この面の検討を疎かにしてきたことは、否定しがたい。台湾、朝鮮半島のみならず、日本が一九三一年から四五年まで事実上支配した「偽・満洲国」についても、近年、植民地主義との関連で政治経済分野での研究が急速に進展した。だがその文化資源政策の側面は、多くが語られることのないまま、最後の生き証人たちが世を去る時期を迎えている。本書に隣接する課題領域として指摘しておきたい。^③

脱植民地主義が云々される二一世紀の現在、ロンドンやベルリン、さらにパリやブリュッセルといったかつての帝都は、肉体・知能両面で旧植民地出身の移民労働者の参画なくしては立ち行かない状況を迎えている。日本でも、中曽根内閣時代に留学生十万人計画が実施され、現時点では留学生三十万人計画が進行している。だが、世界同時不況の影響で、雇用創出には、はかばかしい将来展望が開けておらず、アジアの人的流動のなかで将来の日本社会をいかに構想するのかの政策的提言も積極的にはなされてはいない。

一九二九年の世界恐慌につづく経済不況と保護貿易政策が、狭量で独善的な国家社会主義の台頭を許し、それが遂には世界大戦を準備したという経験は、けつして過去の遺物ではない。思えば「東洋意識」の異様な高揚が、この危機の時代にみられたのも、おおよそ偶然では済まされまい。大戦後のA A諸国の独立も、広義の「東洋意

識」の発露＝非西洋的主体性の訴え、として検討に値する。とりわけそれらの自己主張が、あくまで西側世界が用意した枠組みにそって構築されたことは看過できまい。なぜならこれら既存の枠組みが、今至るところで軋みをたて、さまざまな水準で、急速に破綻の兆候を見せつつあるからである。一九三〇年代に勝るとも劣らぬ未曾有の危機が、旧来の国家単位、あるいは経済圏同士の軍事的総力戦とは違う形で、しかし環境問題に名を借りた資源争奪や、金融市場における富の著しく不均衡な配分、労働市場の収縮、ネチズンの跋扈といった隠微な局面を通して、不気味な前兆とともに足元から迫っている。そうしたなか、かつての「東洋」統治の無謀なる失敗を見定め、支配者側、被支配者側双方の織り成す「東洋意識」の帰趨を、全アジア的な視野にたつて総括的に再吟味することが、学術にも要請されている。

もちろん本書一冊をもってしては、文化現象に限っても、そのすべてについて論議を尽くすことなど、望むべくもない。不徹底にしてなお多くの空隙を含んではいるが、それでも問題のありかの一斑を指し示し、今後のあるべき方策への見通しを、僅かながらでも提案できたならば、と念じている。それで編者としての、最小限の義務を果たしたといえるのか否かについては、読者諸賢からのご叱正に待ちたい。

なお、末筆ながら、悪化する出版状況のなかで、本書の刊行を快くお引き受けいただいたミネルヴァ書房、および年度末納品の時間的制約下で、本書の編集にご尽力いただいた、担当の東寿浩氏に、この場を借りて、寄稿者を代表し、編者として、ひとこと、甚大なる御礼と、心からのねぎらいの言葉を申し述べたい。

平成二四（二〇一二）年二月二日

編者 稲賀 繁美

(1) 当該論文の日本語版は「翻訳」の距離と比較文学の前線」として、日本比較文学会(編)『日本比較文学界創立六〇周年記念論文集』越境する言の葉』彩流社、二〇一一年、二三―三二頁に所収。なおその原型は「いま〈世界文学〉は可能か?」―「全球化のなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う」『比較文学研究』東大比較文学會、九二号、一〇四―一二頁、二〇〇八年の英文要約である。

(2) 詳しくは以下を参照。稲賀繁美「小松清とヴェトナム…日本の仏印進駐期「文化工作」とその余波―木下空太郎のヴェトナム訪問(一九四一年五月)から小松清のヴェトナム退去(一九四六年六月)まで」*Proceedings of Japanese Studies in Southeast Asia: Past, Present, Future, Vietnam Academy of Social Sciences, Hanoi, Vietnam, Oct. 22-23, 2009* <http://www.jisa-asean.info/>

(3) 国際日本文化研究センターでの関連する行事のうち、本共同研究と並行する時期に開催され、編者も参画した主要な企画(共同研究会以外)に限り、以下に簡単に列挙する(題名・組織者・場所・日程の順に記載。場所記載なきものは、すべて京都の国際日本研究センターを会場とする。*・報告書刊行済)。
 ◆「東アジア近代における概念と知の再編成」鈴木貞美・劉建輝 二〇〇八年一月一七―二〇日(*)。◆「北アジア文化史の再構築」劉建輝 長春・東北師範大学・ハルビン大学、二〇〇九年九月九―一四日。◆「近代東アジアにおける鍵概念…民族・国家・民族主義」鈴木貞美・劉建輝 広州市・中山大學、二〇〇九年一月二五―二七日(*)。◆「近代東アジア歴史研究の現状と既存資料の有効活用」劉建輝 二〇一〇年三月五―六日。◆「東アジアにおけるトランス・ナショナルリズム…人文学の可能性」鈴木貞美 二〇一〇年七月一六日―一七日。◆「中国東北部と日本…百年関係史の整理と再編」劉建輝 二〇一一年三月四―六日。◆「植民地帝国日本における支配と地域社会」松田利彦 二〇一一年七月一三―一六日。◆「生態・資源から見る近代『満洲』…戦前期からの連続・非連続を中心に」劉建輝 二〇一一年、十一月二五日。◆「植民地朝鮮と宗教…トランスナショナルな帝国史の叙述にむけて」磯前順一 二〇一二年二月二―三日。◆「帝国と高等教育―東アジアの文脈」酒井哲哉 二〇一二年二月一―一二日。